

開催にあたって

江戸時代の栗橋の地は、五街道の一つである日光街道栗橋宿として発展しました。また、この地は利根川の渡河点でもあり、交通の要衝であることから、江戸幕府によって人や物資の往来を管理するための関所が設置されました。栗橋関所は、明治2年(1869)に廃止されるまで、江戸幕府の交通・流通支配を担う拠点として機能しました。

当館には、この栗橋関所の管理・運営にあたった番士の一人である、足立家の史料約1,300点が寄託されており、「足立家文書」として公開されています。この足立家文書のうち「栗橋関所日記及び関係資料」94点は、平成15年(2003)に埼玉県指定文化財に指定されました。県ではこの貴重な史料を県民の皆様に活用していただくため、その一部を『埼玉県史料叢書 栗橋関所史料』として翻刻し、計画的に刊行してまいりました。

本展示は、その最終巻となる『埼玉県史料叢書第16巻 栗橋関所史料五』の刊行を記念して、第16巻に収録される「御用留」「御関所日記」などから、戊辰戦争を中心とする幕末の動乱と栗橋関所の廃止に関する史料を紹介するものです。

本展示を通じて、本県における幕末維新期の歴史について理解を深める一助となれば幸いです。

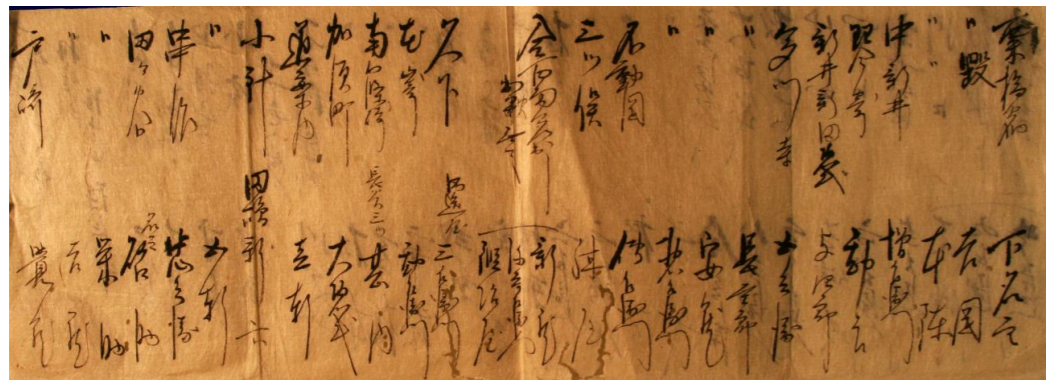
平成25年3月

埼玉県立文書館

1 戊辰戦争の開戦と栗橋宿打ちこわし

慶応4年(1868)正月3日、鳥羽・伏見の戦いが勃発(戊辰戦争開戦)、官軍(新政府軍)は江戸に向かって進撃を開始しました。栗橋関所(正式には「房川渡中田関所」)の「御用留」には、「大坂大戦」があって徳川慶喜・松平容保が船で急に江戸に帰って来たことを知らせる諸家の早駕籠が10・11日頃に通ったとあります。25日以降、負傷して国元へ帰る会津藩士が栗橋関所を通行し、2月17日には隠居した容保が通っています。

3月9日、東山道軍は下野国梁田宿(栃木県足利市)の旧幕府軍(8日まで羽生陣屋に在陣)を撃破、翌日には羽生陣屋を焼き討ちしました。このとき栗橋宿には旧幕府の新遊撃隊が宿泊しており、官軍襲来の情報もありましたが、同隊は退避して事なきを得ました。しかし、羽生陣屋焼討ちを契機に発生していた打ちこわし・放火が、12日には栗橋宿に波及して関所も襲撃されました。



6 羽生陣屋他放火・打ちこわし家々書出

【鬼久保家2615】



(『新編埼玉県史図録』掲載図に加筆)

2 戦況の推移と栗橋関所

栗橋関所史料には、軍勢・武器の通行記事や各地の戦況に関する情報が多数記載されています。

慶応4年(1868)4月初め、宇都宮藩救援に向かう官軍が栗橋関所を通行しました(11日江戸開城、脱走兵多数)。16・17日の下野国小山の戦いで官軍は敗退し、18日には関所の通行改めを厳重にするよう官軍から指示が出ています。宇都宮城が落城した翌日の20日、官軍の命によって彦根藩士が関所へ勤番することになりました。勤番は古河藩に交代し、通行改めは勤番藩士が担当、番士は立会として関所に出勤しました。ちなみに、4月26日には、板垣退助(土佐藩士)が関所を通行しています。

6月初め、旧幕府勘定所が民政裁判所となった知らせを受けた番士たちは、関所が存続するならば継続勤務したいと希望しましたが、奥羽・下野が鎮静するまでは、通行改めは勤番の古河藩士に任せたい旨伺いを立てています。その後、一旦罷免される等の曲折を経て、番士たちは「朝臣」となり、9月1日より関所への立会出勤を再開しました(通行改めは引き続き勤番藩士が行い、席次は番士たちが上席)。



28 徳川奥羽屋

ろうそく屋を描いた錦絵です。会津藩を中心とする東北諸藩と官軍(薩長等)の戦いが長引いている状況を、売買の交渉がうまくいかない様子で暗示しているとされます。

ろうそくは会津の名産で、のれんの「徳用」は「徳川」とも読めます。そろばんをはじいている大番頭が会津藩、腰掛けて値段を掛け合っている人物が長州藩(毛利)です。

【小室家6362—1】